

デンマーク の女たち



▲うさみ のぶこさん

北海道新聞 文化部 次長
宇佐美 暢子

十月初旬、初めてデンマークを訪れ、働く女性や起業家の人々と会った。誰もが、生き生きとのびやかに、豊かなアイデアと行動力を持つていた。

一泊したユトランド半島東部、トーシューのソーレンセンさん夫婦が経営する農家の民宿、ファームステイは、部屋数二十以上、年間述べ五千人が利用する大規模なものだ。

工芸学校の講師だった妻のピエテさん（六二歳）は結婚後、酪農を手伝っていたが、「もの足りなさを感じて」、新聞で知ったファームステイをやってみようと思った。以来、三十年。海外からの客も多く、農業研修などにもよく利用されている。夫のアクセルさん（六八歳）は息子二人と共同で四一〇ヘクタールの農場で乳牛二百頭を飼っている。ピエテさんは「やりがいがあるし、年間を通じて安定した収入にもなる」と語る。アクセルさんも「搾乳ロボットの導入など集約化を試みた農業と並行してやることに意味がある」と満足

そうだった。

デンマークの農業は環境に配慮していることで知られる。エコロジー農業については「環境を最優先する緑の農業というよりも、環境、価格などそれぞれの折り合いの中間点を求める黄緑農業を目指している」と話していた。

リンゴジュースメーカー「リノックビューフード」創設者のアンドルーセンさんは七十七歳。アンデルセンの生家で知られるオーテナンセに近いリノックビューにある工場でにこやかに迎えてくれた。

母親が庭のリンゴを使って台所で作ったジュースからスタートしたこの会社は、今ではジュース販売の国内シェア一位。添加物を使わない製品は病院などの大口需要を得て、売り上げを伸ばした。ジャムやヨーグルト用果実の製造、加工にも生産を拡大、原材料は海外にも輸出している。

この間、二人の子どもも育てた。「子供を産んで育てる家庭を経験したことは経営にも役立つ。女性のリーダーは女性の感性を生かす

◀「ピエテさん（右から2人目）案内でソーレンセンさんの牧場を見学



べきで、男性と同じことをしようとする必要はない。（英国元首相の）サッチャーのようになつてはいかない」と話したのは印象的だった。また、「企業にとつて一番大切なのは従業員。従業員の能力を最大限生かすことが経営者の仕事」と、人を大切にすることを貫いていて、



▶「リユンクビューフード」工場

工場内を歩いているだけでも、従業員から信頼されているのがよくわかった。母親から受け継いだという「平和を守りたい」という気持ちから、政治の分野にも進出、市議会議員、国会議員も努めた幅広い生き方には感心した。

コペンハーゲンのデザイン会社「ハルスコフ・タルスガード社」は、三十代の女性二人が経営していて、アンドルーセンさんの世代とは少し違う意識を持っていた。

産業デザインの世界はデンマークでも男性中心。このため、女性だけで独立して会社を作ったというメンバーのひとりハンナさんは「だからといって女性であることを売り物にはしていない。女性であることのメリット、デメリットも特に感じない」という。照明、ドアノブなどの建築デザイン、キッチン用品、介護用ベットなど幅広い分野のデザインを手掛けている。使いやすいそうで美しい哺乳びん立てについては「ちょうど子供が産まれたときに偶然引き受けた仕事。メンバーみんなでわいわい

話し合いながら検討してできてよかったわ」と笑った。子供もいる家庭生活を楽しみながら、プロとしての誇りを持って働く三十代女性は頼もしいと思つた。

バイレ州の女性起業家ネットワークを作ったネテさんの行動力とアイデアには刺激された。

ネテさんはホーセンス市の公共職業安定所の男女平等コンサルタント。デンマークでもまだ少ない女性起業家を育てる必要を感じてまず公共職業安定所で養成講座を開いた。起業のノウハウを徹底的に教育、自分のプランを立てて、実際に銀行の融資を受けて資金を作るところまでを実現させた。この研修を受けて起業家となった女性が集まり、ネットワークを組織したのだ。

欧州連合（EU）の中での女性起業家教育、研修協力プロジェクトにも携わっていて、バイレ州に女性起業家の製品展示場を作った九八年には「国際女性起業家メッセ」を開く。企画中のトレード・ハウス・プランもユニークだ。ひ

◀「リユンクビューフード」の創設者、アンドルーセンさん



▶バイレ州の女性起業家ネットワークを作ったネテさん（左端）

とつこのトレード・ハウス（電車の車両）にその国の女性起業家の製品を乗せて走り、次の国でまた一車両を連結、交流を深めながらEU各国を横断するというものだ。すでにEUから予算も獲得、九九年には実現しそつで、「どうです。今度は日本まで走らせましようか」と呼びかけた。

ネテさんたちの数十人規模のネットワークに対し、コペンハーゲンの「女性ビジネスオーナーズ協会」は、全国規模の組織だった。会員は現在百二十人。広告代理店、旅行会社、人材派遣会社などを経営するメンバー十人と茶話会を持つた。会長のリユツケさんは、毎年誕生する一万五千社のうち三分の一が女性起業だが、五年後には六割が消失する現状を説明。「抱える共通の問題を解決し、相互の協力関係を育て、起業家を目指している女性を支援するために作った組織だが、将来、このネットワークが必要でなくなる時代がくることを願っている」と話していた。

デンマークは日本よりも女性の社会参加が進み、男女平等が実現しているように見える。だが、実は悩みも多い。そのことは訪問する先々で感じていた。前労働大臣で前女性連合会長のミユラーさんと話して、「やはり」と確信した。ミユラーさんによると、一八七一年に女性連合が組織され、運動を重ねた結果、男女平等の各種法律は整備されたが、賃金はまだ不平等。仕事と家庭の両立も最大のテーマのままでという。母から娘に歴史を伝えていますが、若い世代は平等だと思っている。現実の目に見えない不平等が見えていないだけに問題だ」とため息をついた。

しかし、日本の差別の実態を話すと、「ここは忍の一字。時間がかかる。もちろん変えるエネルギーは必要。バイオリンは一本の弦で弾かないで、複数で。つまり法律を変えるだけでなく、社会のムードや教育も変えなくちゃ」と逆に励まされた。それぞれの労働事情を語り合ったミユラーさんとの二時間は貴重な出会いだった。